



型にはめない瀬野氏の指導で、個性的な打者が生まれた

球界を代表する

ボーイズリーグ「堺ビッグ

DeNA・筒香

梅檀は双

胸の内に秘めた熱い思いを、バットスイングであらわしてきた

体を万全な状態に戻すだけでなく、根本的な体の使い方も教えてあげたい。瀬野氏は約20年前、知人の紹介で親交を深め、現在は大阪市内で接骨院を営む矢田修一氏に、チームとして選手の体の状態を毎年、定期的に見てもらうようにした。新入生は入部時に全員、矢田氏から体のチェックを受

横浜高校を選んだ理由

ける。矢田氏が当時の筒香を振り返る。

「とにかく体が大きく、中学入学時に170cmをゆうに越えていた。助走をせずに、立ち3段跳びをやらせると9m。同年代で運動能力が高い子の平均より1mも長い。バスケットをやらせたら、超一流選手になれる潜在能力で、全身バネのようなイメージです。

ただ、当時の筒香くんは腰痛に悩み、さらに肩や肘にも痛みを抱え、その能力を十分に發揮できない状態でした。痛みの原因は、小さな頃からの反復練習で体に変な癖がつき、関節や筋肉に歪み

中は球拾いぐらいしかやらせてあげられませんでしたが、彼は休むことなく、自宅のある和歌山から毎週、家族の車で1時間かけて練習場に来まし

平日も定期的に来ていて、
その結果、歪んでいた姿勢が治ると、体に余計な力が入らなくなり、ボルトをとらえるインパクトの瞬間に、最大の力を出す方法を彼は会得したのです」

体の痛みが消え、本格的に練習できるようになつたのは中学3年になつてから。筒香は小学校時代に在籍した和歌山ニューメッツでは、小5、小6年の2年間で練習試合も含めて40本塁打以上を記録。飛距離もすでに90m近く飛ばす能力を備えていた。練習に本格合流した後は、試合で使用する金属バットではなく、

が生じていたこと。中学
生特有の成長痛も加わ
り、相当な痛みだつたと
思います。

二人のスラッガーは同じチームの出身だった

「ボーイズ」の恩師が明かす

と西武・森、

葉より芳し。

野球に取り組

41打点はともにリーグ2位（数字は11日現在、以下同）。首位争いをする横浜DeNAを牽引している。

伸びていなかつた。結局、厳しい練習を一方的に課すことでお腹いっぱいにしてしまつた。人生で一番発育する中学生の年代で、野球漬けにしてしまつた自分の指導法を猛省し、子供たちが『野球をやれる』明日が楽しみで仕方がない』と自然に思える指導法への転換

今季の球界を沸かせる一人の大砲には共通の恩師たちがいる。体格も、性格も、打撃スタイルも違う二人に埋蔵されたあふれる才能をいかに引き出したのか。大坂・南東部を訪ね、秘密を探つた。

――かつては勝つことが
教え子のためだと思つて
いました。私が監督のと
きに全国優勝も2度経験
できました。ただ振り返
つてみると、教え子が肩、
ひじなどを痛め、あまり
なかつたんです。

目一橋練習しそうなのが
入部後、あちこち体の痛
みを訴えてきた。その影
響もあって、中学1、2
年の時はトップチームの
20人に入ることは一度も

目一杯練習しそうなのが
入部後、あちこち体の痛
みを訴えてきた。その影
響もあって、中学1、2
年の時はトップチームの
20人に入ることは一度も
なかつたんです。

「森は中学2年までは投手で、3年になつて捕手をやらせるようになります。投手としては、130km後半の直球を投げる力があった。1学年上に、大阪泉北ボーイズの藤浪晋太郎（阪神）、オール狭山ボーイズの北條史也（阪神）や田村龍弘（ロッテ）などがいて、彼らと投げ合い、抑えていました。でも、森は上背がなく、『投手としては、どこかで頭打ちになるのでは』という危惧もありました。本人には投手をやりたい気持ちもあったのですが、打撃に専念のか。現監督の土井清史氏が振り返る。

今と同じで、打率も5割ぐらいあつたかもしれない。メインの練習場のホームベースから、左翼ネットを越えた場所に室内練習場があり、距離にして90mぐらい。森が金属バットで打つと室内練習場にあたりそうになるくらいまで飛ばしたので、彼には木製バットを持たせ、左翼方向に力強いボールを打つことだけを意識させました。スイングスピードもすごかつた。おそらく、自宅でもバットを振っていたと思いますよ」

子供たちに好きな野球をいかに楽しませ、主体性をもって取り組む子に育てるか、という指針を共有できたので、指導は全面的にお任せしました。以前は、夜まで続くこの

フルスイングの教え

森は「今日はやる必要がない」と思った日は自己主練習をせずに他の子よりも早く帰ることもありました。が、それを私たちが叱ることもありませんでした」

持ちです。体が小さくて
も、打てるなら誰でも本
塁打は打ちたいものです。
昨シーズン、メジャー
リーグはベネズエラ人の
アルトゥーベ内野手が首位打者、最多安打、盗塁
王に輝きました。彼の身
長は167cmです。

昨年11月、日米野球で
来日したときも、彼はフル
スイングしていました。そ
ういう選手が今、日本に
はなかなかいない。森に
はもつともっと活躍して
もらい、子供たちに夢を
与えられるような存在にな
ってほしいです」

梅檀は双葉より芳し。
筒香と森、類い稀な二人
の野球少年の才能は、「型
にはめない」ビッグボーン
イズの指導方針で、大き
く花開いたのだ。

163

木製バットで左翼方向へ
強く打つことを徹底。ボ
ールを長く見てバットコ
ントロールをよくする基
礎を体に叩き込み、公式
戦での「大爆発」に備え
た。瀬野氏が続ける。
「練習が十分できなかつ
た2年間で、筒香の体は
車にたとえるならば、部
品を交換して、走る準備
ができるのだと思いま
す。中3の全国大会で本
墨打も打ち、活躍しまし
たが、「あんな選手いた
の?」と周りのチームか
ら言われたぐらいです」
　高校の進路を選ぶ際、
関西の強豪校から誘われ
たが、筒香は誘いが来な

かつた神奈川の名門・横浜高校への進学を熱望。絶対に譲ろうとしなかつた。筒香の一途な思いに、瀬野氏は目を丸くした。

「ウチは進路先を決めるとき、選手の意思を尊重しますが、筒香は関西の強豪校からも誘われていたので、『どうして横浜高校を希望しているのか』と聞きました。すると、

横浜高校進学後は、1年生、代々木の図書館で、が、今でも

筒香は『松坂（大輔）さんが出ていた、横浜・P.L学園の延長17回の試合を見て憧れました』と言っています。そのP.L学園には、ウチのOBでもある大西（宏明、元近鉄）がいたので、『P.Lに行きたい』というならわかるんですが……。筒香は素直な子でしたけど、そこだけは譲らなかつた

トを振り、矢田接骨院に出向いて、体の状態を確かめた。矢田氏が明かす。「プロに入つてからも、ちよくちよく寄つてくれます。プロ入りした後、筒香くんに面白半分で直径約30cmの塩化ビニル管を、バットの代わりに振らせたことがあつた。長さ約1m、重量も7kgありましたが、振つてみたら案の定、よろめいた。

でも、その数カ月後、再び彼が来たとき、ブーンと音がするぐらいに、フルスイングして見せたんです。これには、驚いた。簡香くんは、自分で同じようなモノを買い、密かに素振りを繰り返していました。バットよりも振りづらい形状の塩化ビニル管をフルスイングするには、通常よりもはるかに高度なバランス感覚が必要。腰椎をしつかり安定させないと、体の軸がぶれてしまう。でも、それをやってのけてしまった陰の努力に、彼の凄さがあると思います。



筒糸が実際にスイングした拘束筒を持つ矢田氏

誰よりも才能があると思つて
入つたこの世界。
長く続く一軍暮らし、
思わぬ故障、そして戦力外通告。
巨人最強時代を生きた男たち。
出口のない時間を経て、
彼らは何を掴み、
その後、どう生きようとしたのか。

プロ野球 「第二の人生」。

赤坂英

ISBN978-4-06-219518-8

